



Title	弔い論をひらく
Author(s)	川村, 邦光; 永岡, 崇; 北村, 毅 他
Citation	日本学報. 2016, 35, p. 87-109
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55489">https://hdl.handle.net/11094/55489</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 弔い論をひらく

語り手：川村邦光

聞き手：永岡崇、北村毅、ファクンド・ガラシーノ

### 弔い論のはじまり

**永岡** 今日はこの八月に出た『弔いの文化史』、同じく今年書かれた「ジョバンニと弔いのイニシエーション」、そして二〇一三年の『弔い論』という<sup>1)</sup>、一連の弔いをめぐる研究について、川村邦光さんご自身に語っていただきたいと思っています。加えてこの弔い論には、東北の巫女さんの話と、他界論や家族写真論、戦死者論などのようなこれまでに扱ってきたテーマがけっこう出てきて、かつ、新たな光が当てられています。『弔いの文化史』のあとがきにあるように、川村さんの仕事の一つの総括と見ることもできなくもないだろうということで、ここに至るまでの過程を検討しながら、弔い論の意義について詳しくお話を聞きたいと思います。順番にいきますけれども、弔い論の直接的な始まりは、おそらく「誰が死者を弔うか」<sup>2)</sup>という、『弔い論』の序章になっているものですね。この論文の中に、死者と遺族と弔問者、三者の循環的な関係など、新しいアイデアが盛り込まれています。「弔い」というものについて集中的に論じるようになった経緯といえますか、発想は、どのようなところから来ているのでしょうか。その前に取り組んでいた戦死者研究と、当然密接なつながりがあるのだと思うのですけれども。

**川村** あまりないような気もするのだけれども、何かというと、おそらく戦死者（また東北の巫女）からなんだろうね。その前に、『幻視する近代空間』<sup>3)</sup>の「近代日本と霊魂の行方」という章。その辺から始まっているといえば始まっているのですけどね。だいたいこの間は、昔に戻ってやり直したものが多いかな。この『弔いの文化史』は、本当のところは昔に書いたものをどかすかと入れまくって、編集し直しました。あとがきに、「これまで私が考えたり、調べたり、書き記したりしたことを取り入れて、たとえば巫女の口寄せの事例などをあらためて解釈し直して再考し、いわば総括したものである」<sup>4)</sup>と言い訳を書いているのですけれども、これは、実はかなり簡単にできてしまったというところがあります。ほとんどは、前に書いたものを入れ込んだ。「はじめに」と序章の部分が、改めて書いた部分です。特に鴨長明の『方丈記』あたりをもう少し長くしたかったのだけれども、やめてしまったというところですね。

## 弔い論をひらく

永岡 『弔い論』の方は、もう少し前から書いているものですね。

川村 これは思い込み、構想としては、やや哲学っぽくいきたいなという考えがありました。しかし、哲学的な味わいのあるようにはあまり書けないということで、事例的なものを、前からやっていたものをどんどん入れました。小泉義之さんの『弔いの哲学』<sup>5)</sup>などをやや意識はしたのですけれども、もう少し広い知識がなく、何よりも思索を展開することがなかなかできなかった。「誰が死者を弔うか」でだいたいのところは終わったかなという気がしたもので、もはややめようと。

それから、これをやる上でけっこう参考になったものが、訳本で出ていた『死者を弔うということ』<sup>6)</sup>というもののなのですけれども、世界中の弔い、埋葬をジャーナリストが書いたものです。その本人はアメリカに住んでいて、アフリカのガーナで、エンパイア・ステート・ビルディングのお棺を作ってしまったという人がいるんですけどね。そのアフリカのガーナの何とかという地域(ガ族、ヌングア)で作られたお棺は、民博にあるはずなんです。その辺りについていろいろと書いている人がいるのですけれども。それがけっこう面白かった。あのようなことは、私の場合はできないということで、いろいろな事情によって一国的になってしまう。本来であれば、もう少し幅広くやりたいとは思いつつも、なかなかできないということですね。

やはり直接的には、戦死者論から始まっているのだろうという気がします。一九八六年の安丸良夫編『近代化と伝統』<sup>7)</sup>に収録されたもの、そのあたりから靖国神社を少しやろうとしていたのですけれども、日本政府、日本なるものを批判する際の媒介として、靖国神社があるのではなかろうかというところが、かなり前からの問題意識です。国家なり、体制批判をやっていこうということが、何となくの、これまでの一応の問題意識ということですね。やはり死者というものが、いろいろな意味でそのような批判の媒介になり、やることができるのではないかということです。

永岡 国家批判、体制批判というのは、学生時代からのものなのですか。

川村 学生時代は、恥ずかしながらの実力闘争の時代だから。わずかな時期だけね。その後、実力闘争がだめだということで、言葉で、ということになってきた。集団ではなくて一人でいこうかという、寂しく道を歩もうというような気もあったということかな。

## 死者へのまなざし

永岡 川村さんの弔い論の一つの特徴と思われるのは、死者を弔うということと、生者が、弔うことによってその人の生を更新していき、変態していくこととを連関させて考えていることです。『幻視する近代空間』の時からか、あるいはもっと前からかもしれないですけれども、死者と生者の関係を軸に歴史を再考するようなものが、割と一貫して見られる

## 弔い論をひらく

ように思うのです。その辺の死者を通して歴史を考え直すという発想は、どのようなところから来ているのでしょうか。

**川村** どのようなところなのかよく分からないけれども、何なんだろうね。一つは、一九七二年、沖縄闘争の時ですか。同学年の農学部の学生なのだけれども、焼身自殺したことが、やはりずっとあったのだらうという気がするね。そのあたりと、だんだん年を取って、死んでいく人がやや多くなったということもあるかな。そのようなところで、死んだ人との関わり合いが、私自身もそれなりに考えていったというか、考えていこうかなというところがあったのだらうという気がするかな。

さっき永岡さんが言ったような、死者と生きている者の関わり合いで、生きている者が絶えず死者を見つめながら生きていくという、そのようなことばかりやっていたら、実際のところけっこう大変だろうと思うんですけどね。私の場合も、それほど死んだ人のことを考えながらやっているわけではない。ある意味で格好をつけてやっている面も少々はあるのですけれども、これまでの歴史研究は、そのようなところは視点としてなかったのだらうと思うのです。古文書の中の集合的な人たちを扱っているのが、日本史なのだろうと思うんだけどね。そのようなところよりも、もう少し具体的でもないけれども、ある種、死者なり、名前のある死者というようなところを考えていくと、何か面白いことがあるのだらうということもあったのだらうという気がするところです。

**永岡** 今、おっしゃっていたことは、ある意味、個人史的な要因だと思うのですけれども、読んだものから影響を受けたというようなことは。

**川村** あることはあるのだらうけれども、靖国とかそういうあれは置いておいても、私のやり方、真似のしかたというものは、おそらくは安丸良夫さんが大きいのだと思うんだけどね。小説の方では、やはり高橋和巳かな。あのあたりのものが、けっこう大きくなっているんだらうね。安丸さんが一九七〇年代あたりにやっていたのは、だいたい幕末だったんで、その辺りをもう少し近代に移してやってみれば、こちらもやる領域が出てくるかなということだった気がします。

**永岡** しかし、安丸さんは、あまり死者の話のようなことはしていないですね。死者については、わりとオリジナルなところなのですか。

**川村** あとは、あれでしょうか。あまり関係ないか、最初に逮捕されたのが建国記念日だったという(笑)、取ってつけて言えばということだけれども。国家なるものをどのように解体していくかというようなことを、改めて考えたところもあったという気がする。

## 神と宗教

**永岡** 去年、金光教の教学研究所で弔いについての講演をされましたけれども、そのとき

## 弔い論をひらく

に、生者と死者の関係について論じているけれども、そこに加えて神という存在を組み込んだ議論が必要なのではないかと、そのような質問があったんですね。そこに対して川村さんは、「できるだけ神という概念を出さず、人の問題として、まずは決着をつけた方がいいと考えています」<sup>8)</sup>と答えているわけです。

**川村** なかなかいい答えだね(笑)。

**永岡** このところは、宗教的なものに対する川村さんのスタンスを理解するために、けっこう重要なポイントなのだろうと思うのですがけれども、そのへんのところを、もう少し展開して説明していただきたいのです。

**川村** 金光教の人たちに対して、神様のことを全面的に否定するようなことを言うことはできないだろうと思ったから、そのようなことを言ったのだと思いますけれども、私の場合は、それほど宗教的な世界のことは、ほとんどというか、まったく信じていません。どうでもいいというか、信じる人は信じていいのだろうと思うんだけどね。そのような人はそのような人で、いてもいいと思います。また、先祖の霊魂、死者の霊魂のようなものも、本当はどうでもいいと言ったらいいか。ただ、そのようなことをある意味では信じている人たちがいて、そのような文化がずっと作り上げられてきたという、それはどのようなことなのだろうか、というところだと思うのだけれども、つまるところ生きている人間は、死んだ人を土台にしながらやっていくのだろうと。生きている人間も、その列にやがて加わっていくだろうという、そのようなプロセスが当然あるのだろうと思うのです。

そのときに、そのような霊魂的なものを考えることは、おそらくこれから徐々になくなっていかもしれないのだろうと思うんだけどね。そのようなことに対して何らかのことを言えればいいのですけれども、なかなか私の場合、「霊魂なんてどうでもいいんだ。そんなものに執着していたら、ろくなことないよ」と言ってしまうと相手を傷つけるだろうということもあるし、そのようなところは言わないで、霊魂なるものを信じてお祭りする人たちは、それはそれでいいのだろうと思うのです。ただ、死んだ人との関係で、ある意味では自分自身の生き方のようなところがそれなりに出てくれば、それでいいのではないかというところでしょうか。つながっていないような気もするけれども。

たとえば鈴木岩弓さんが『弔い論』の書評で、いわゆる僧侶のような人がなぜ出てこないのだと書いています<sup>9)</sup>。私の場合、僧侶とか宗教者に関しては、評価すべきところがないというか、批判すべき対象としては出してもいいと思うのですけれども。たとえば地震の際に何かやりましたと。それで飯を食っているのだろうし、誰でもやるのは当然だろうと。それを、あえて「宗教者が立ち上がる」というような形で評価している人たちは、人のいい人たちだなどと思っているんですけどね。

あの人たちは、確かに引導を渡すというか、葬式のときにお経を読みます。それも一つ

## 弔い論をひらく

の重要な役目かもしれないけれども、もはやそれすらも不必要な時代になっているだろうし、かつてを考えれば、いわゆる聖職者のような者が媒介になって葬式をやることが出てくるのは、江戸時代中期以降、檀家制度が出来上がってからだだろうし。そのようなものがないとしても、遺族と知り合い関係と死んだ人の三人の関係だけで立てれば、よほどすっきりした関係が考えられるだろう。そこでやった方がいいし、考えた方がいいと思っています。いわゆる聖職者のような人たちは、外部で少し支えればいいということが、ある種の弔いの哲学のようなところ。聖職者というものは、確かに歴史的・文化的にはそれなりに意義もあるだろう。りっぱな仏像を見れば、それなりにいいと思うだろうし、かつての人であれば、「浄土というのはいいいところだね」というようなことを思う場合もあるだろうというところだね。仏教的な文化を否定する気はないのだけれども、お釈迦さんの教えのようものを考えるのであれば、現代の仏教は捨て去ってもいいのだろうと思うところですね。鈴木岩弓さんの場合、臨床宗教師、あのようなものを立ち上げています。どのようなわけであのようなものが好きになったのか、よく分かりませんが、あれにどれだけ意義があるのかという気が、しないわけでもない。宗教者のような者に死の看取りを頼っても、しかたがないだろうと言ったらいいかな。

あの人たちは、これまでの自分たちの仏教教団の歴史を総括してみれば、何をやってきたかだいたい分かってくると思うのです。単なる金もうけだよ。俺から言わせると、骨を担保に取って、質ぐさに取って金もうけをやっていたのが坊主だろうということで、どのように作り上げるのかよく分からないけれども、あのようなことをやってもしかたがないのではないかという気がしないわけでもない。また、そのような人に頼ることも、やはりつまらないことだろうと。身近な関係の中での、狭い関係になるかもしれないけれども、そのような中で人はだいたい生きているだろうし、その中でそれぞれが生き方、死に方を考えれば、一番いいのではないかなと。

**永岡** 今、けっこうな宗教者批判が展開されたのですけれども、神様の方に引き戻したいのですが、たとえば天理大学時代に書いていたキリシタンの論文<sup>10)</sup>や、最近だと第二次事件前後の大本についての論文<sup>11)</sup>などを考えると、神様のなものや、それとの出会いによるメタノイアというか、超越的なものと関わったときに人間が変わっていくというようなところはけっこう書かれているように思うのですけれども、その辺はいかがでしょう。

**川村** 書いてはいるのだけれども、私自身が何しろ経験もないもので、神様のようなものを感じたことはいっさいありません。概念としてはあってもいいのだろうけれども。心情が転換する、心の革命のようなものが、大本の信者の手記のような、『おかげ話』<sup>12)</sup>という本を見ていると出てくるんだけど。その人たちも、実際に神様なのかというと、出口王仁三郎であれば王仁三郎、あるいは布教師、宣伝使というのか、大本の指導者。そのよ

## 弔い論をひらく

うな人たちとの関わり合いなのだろうという気がする。神様というのは、取ってつけたようなものと言ったらいいかな。どうも私の場合、神様というものにもあまり関係なく生きてきたもので。一九四五年までかもしれないけれども、神様のようなものを立てながらやってきた日本、現在の天皇もそうかもしれないけれども、そのような国は、ある意味で非常に小さく凝縮して、ちぢこまっていくというか、いろいろなことを見てみると、そのようなことにならざるをえないのだろうと思います。

でも、その辺はキリスト教はどうなのでしょう。イスラームもそうかもしれないけれども、いわゆる世界宗教という言葉で言われる宗教とは何なのだろうかということは、若干あるんですけどね。イエス・キリストの十字架像のような、いわばマゾヒズムの典型をばんと出したようなものを飾りながら、なぜあのようなことをやっているんだろうか。やはり人間というものは、究極的にはみんなマゾヒズムなのか、そのようなところがあるのかということも考えてしまう。それに対して、イスラームは戦闘的で、図像では表現しないけれども、模様で表現していくというところでは、開かれている宗教なんだろうね。ユダヤ教もそうかもしれないけれども、ユダヤ教よりもイスラームの方が、ある意味で美的な感覚に優れていると思っています。イスラームにまったく関係がないのだけれども、今、考えてみると、あのような環境にいれば、俺もイスラームの過激派になったと思います。九・一一もそうだけれども、あのようなことができるのは、やはりイスラームだなと。かつての十字軍は中途半端だと思うけども、イスラームの人たちは、死んでしまえば、殉教すれば天国へ行けるといって、それが強固にあるというのかな。あの若い者たちが、たんに侮蔑的に、利用され、洗脳されていると言ってしまうかもしれないけれども、確固とした信念はすごい。その信念なるものが、この日本であまり作られてこなかったというか、特攻隊にしても、アジア・太平洋戦争でも、そのような信念の欠如した国。だから俺なんかは、そこでアバウトに、いいかげんに、曖昧に生きていくことでいいという気がするんですけどね。きちんとした世界にいと、本当のところは大変だろう。あのような中で育てられれば、自己犠牲の信念をもって自爆にでも行ってしまうのだろう。

## 亡霊と体制批判

**永岡** ついでにこれも聞いておこうと思うのですが、「亡霊の研究はやるけど、妖怪はやらない」とよくおっしゃっているように思いますが、これは、どのようなことなのでしょう。

**川村** 妖怪は小松和彦さんの専売特許のようなものだから、あれをやっても、大したことができないだろうということがあります。それが一つ大きいだろうけれども、時代に対する批判のようなところは、やはり幽霊の方が強く出せるということが大きい気がする。妖

## 弔い論をひらく

怪の場合も、当然、文化批判のようなことはあるだろう。付喪神のような場合、物が人間に復讐するようなどころでは、妖怪の方が、というはあるだろうと。しかし、実際のところ、幽霊にしても妖怪にしても、生きている人間が作っているわけだろうからね。幽霊の場合、単純に心理的な後ろめたさのようなどころで幽霊がつくられるのかというと、おそらくは、もっと違う面があるだろうと。たとえば、かつて戦争で人を殺して、幽霊が出てくるという人も、自分自身の後ろめたさというよりは、自分の生きる支えとして幽霊を作り上げてくるような、もっと積極的な面があるのではないのかなと。本当はその辺りも書きたかったのだけれども、なかなか難しい。たとえば沖縄などで出てくる幽霊、海軍の将校の幽霊が道路の真ん中で火を燃やして、ある意味で日本を表象するような形で、災いをする、悪さをする幽霊をつくり上げていく。単純なのだけれども、反体制的な表象としての幽霊というものが、簡単にいうことができるようなところがあるだろう。当然、怨霊の流れとか、ずっとあることはあるけれども。怨霊は、行き着くところはだいたい反体制だからね。幽霊と怨霊も同じようなものだろね、おそらく。幽霊はいつから出てくるのかということもあるのですけれども、姿形を出しているのは、やはり江戸でしょうか。あるいは室町あたりからあるだろうとは思いますが、姿形は実際ないのだけれども、後になって絵で、菅原道真のような形で怨霊を表象していくといえますか。

**北村** 怨霊と幽霊は、どのように違うのでしょうか。

**川村** 怨霊の場合は、恨みを持ってたたりを起こす、災いを起こすのが怨霊でしょうね。幽霊も一緒に、それなりに幽霊の出現する理由、きっかけはあるわけです。それは、やはり恨みだろうね。幽霊の場合は、作る方が、幽霊自身の恨みを自分自身が表現してやるということもあるだろうということだね。幽霊は、このような形であいつらに恨みを持っているのだと。また、人を殺したという負い目を持っている人自身が作る場面もあるだろうけれども。ですから、幽霊も亡霊も一緒なのだけれども、どのように違うのかね。祟り具合が違うとか、程度の差なのかな。

**北村** 怨霊は、僕のイメージでは、名前がある人という感じです。幽霊の方は無名という感じで……。

**川村** 例えば、お岩さんも累も、怨霊でありつつ幽霊なのかな。平安時代あたりは、やはり怨霊だろうな。それなりに「怨霊から御霊に」という、具体的な名前をつけていくというのが当時のあれだよな。

俺の場合、妖怪といえば、山姥だけはやったんですけどね<sup>13)</sup>。山姥は、三途の川の婆から出てきたんだろね。三途の川の婆も妖怪といえば妖怪的なものだけれども、また別ですね。あれはけっこう面白いテーマだと思ったのだけれども、中国の道教の中で作られて、朝鮮に渡って日本に来て、日本では三途の川の婆が、おそらくは姥神、山の神、どちらか

## 弔い論をひらく

というと姥神と、習合していったのかなということだね。妖怪も、けっこう面白いです。ある種の思想といいますか、民俗的な思考というか、そのようなものがけっこう反映されていて、けっこう面白くやれるっていうところかな。

付喪神などが出てくるときに、室町時代の物語か何かで、瓦のおばけがどのようにできるのかということが書いてあるんだけど、人間との関わりでできてしまうとやっぱりいいのか、人間が無視して、捨てていくとやっぱりいいのか。その辺を考えれば、現在も、いわゆる消費社会のような文化と結びつけることもできるだろう。小松さんとともに、宮田登さんも『妖怪の民俗学』<sup>14)</sup>でやっていたし、かなり同じようなことを言ってしまうなというところがあったね。

それから、少し前から考えていたのは、寿町を舞台にした小川紳介のドキュメンタリー映画『どっこい！人間節』<sup>15)</sup>で、死んだ者を背負って生きていくような発想の言葉（「寿町で生きていくおれたちは、死んでった仲間のことを手がかりにしてしか生きていけねえんだよ。どんなふう生き、そして、どんな死に方してったのかってことを。そして死んでった人間っていうのは、そんなふうにして生きていくおれたちの背中にのっかって、自分のやり切れなかった夢だとか、くやしさをもう一度果たそうとするんだよ」という言葉）を見つけたんだけど、「おお、こういうのもあったのか」で、ぼろっと使ってしまう私なのです。寿町の労働者が催した慰霊祭での葬列を規制する機動隊も出てくるし、なかなかいい光景でした。

死んだ人の思いなり、何らかのものを背負って生きていくという、俺にはあまりないのですけれども、そのような人たちもやはりいるんだろうね。その典型的なものが、石原吉郎さんのような人なのかなということですね。シベリア帰りの人は、画家にしてもそうです。香月泰男さんもそうだろうと思うのだけれども、あのような人たちは、突き詰めていくと素晴らしいものが出せる。私の場合は、どのようなわけかあまり突き詰めない、中途半端になっているということが、我がすべてかなという、この頃の反省ですけれどもね。

### 折口信夫の靈魂論

永岡 では、少し話を進めて、『弔い論』や『弔いの文化史』では、『戦死者のゆくえ』<sup>16)</sup>などと比べて、折口信夫がかなり前面に出てきているというのが一つの大きな違いだと思うのですが、『弔い論』の折口と靖国について論じた章が非常に重要だと思うのです。今まで靖国批判というと、憲法論のレベルやイデオロギーレベルの批判など、いわゆる外部から批判するようなものが主流だったと思うのですけれども、この折口論の場合は、いわば神学の問題として、靖国信仰を内側から破っていくような可能性といいますか、そのようなものを出しているものなのだと思います。これは、かなり新たな靖国批判の視点では

## 弔い論をひらく

ないでしょうか。

**川村** 折口の論文「民族史観における他界観念」<sup>17)</sup>で、盆踊りを例にして論じたものは、考えてみれば、なかなかいいことを言っているのだらうと思うのですけどね。死んだ人と生きている者が、一緒に成長していくのだというところ。あれは、いろいろな形で、靖国でも使うことができるはずだと。戦争中に折口があのようなことを言ったら、「靖国の神と一緒に、わしらも戦っていこうぜ」とか「皇国・護国の鬼もついているぜ」という形でも言えるのだらうけれども、別な形で言えば、単に神様として祭られてもしかたないだらうというところですよ。絶えず靈魂も生き続けていることを考えるならば、それなりに成長させた方がいいだらうと。

もう一つは、わが身近には従妹一人だけですけれども、子供に死なれた親。私の場合、せいぜい猫に死なれているくらいなのだけでも、俺も死んだときには、猫があちらから迎えに来るんじゃないかと(笑)、私の場合、先祖は来ないだらう。人は来ないので、猫くらいは来てほしいなと(笑)。若くして死なれた親たちというのは、けっこういろいろな形で問題になるというか、執着するというのかな。その辺のところを、もう少し誰か言う人がいればいいのかなということ、いつ頃からかよく分からないけれども、前から考えていました。

その辺も、津軽などへ行って少し考えるようになったという気がします。早世した我が子のために、地蔵さんなり、あるいはムカサリ絵馬のようなものを奉納することを、どのように考えたらいいか。花嫁人形や花婿人形。仙台にいる頃、自分の息子が中学生あたりに死んでいて、十三回忌の法要の際に、今では二五歳になっている同級生も来てくれて、生きていれば二五歳になっている息子のために、花嫁人形を供えて津軽まで奉納しに行ったら、自分の心も吹っ切れたという記事が『河北新報』に出ていて、「なかなかいい話だな」と思いました。それが折口のものとなつがっていったということかな。

**永岡** 折口の未成霊に関するものや、「タマフリ・タマシヅメ」に関する話は、『弔いの文化史』だと巫女の話にも入っているし、蓮如の話にも入っていましたか。いろいろと今までやってきたものに「タマフリ・タマシヅメ」の話が入ってきていますけれども、もともとの『地獄めぐり』などを書いている時は、別にそのようなことで書いていたわけではないのですか。

**川村** ありません。そのあたりも、『地獄めぐり』よりも後で、やはり「誰が死者を弔うか」あたりからつながってきたのかな。そして、「鎮魂のゆくえ」<sup>18)</sup>あたりで、ややきちんと出したのでしょうか。折口を出して真面目にやったのは、おそらくあれが最初でしょう。

**永岡** 折口は、面白いのですか。

**川村** うーん。かつては、八〇年代は読めなかった。いつ頃からか、何が面白かったのか

## 弔い論をひらく

な。だいたい戦前のものを読むようになって、魂とか、そのあたりのことをもう少し調べてみようというところだったんだろうね。そして、索引を見ながら関連する場所を、折口はみんな短いから、ぱっぱと読めちゃう。折口は、短いからいいね(笑)。柳田に比べたら、長いものがあまりないね。あの前に、筒井清忠さんの本で、『古代研究』の解説のようなものを書いたことがあるんだけど<sup>19)</sup>、その前から、おそらく少し読んでいます。『古代研究』の二、三巻の方ですか。やはり戦死者関連で折口の未成霊論を見つけてからかな。折口の場合、やはり面白いところは、いわゆる歴史学的・社会学的ではないということだね。「生活の古典」なるものに基づいた奔放な発想……妄想って言ってもいいんだけど(笑)、そのあたりが面白いところだね。柳田國男の場合は、大正末から昭和あたりは社会学っぽいというか、『山の人生』あたりはけっこう読みやすい。後になるとつまらなくなるけれども。先祖崇拜とか、家の存続とか、妄想というよりもナショナルスティックな思い込みを深めてしまって、『先祖の話』はつまらない。この頃、『先祖の話』は靖国批判なんだ、と読む人もいますけれども<sup>20)</sup>、戦争で死んだ人を初代の先祖にして家を作っていき、立てていくという柳田の着想は、靖国批判だと。しかし柳田の場合、靖国についてはあまり言わないけれども、実際のところは、靖国を前提としての話だと思います。そのような意味で、柳田の場合、靖国批判はやっていないだろうと私は思っているんだけどね。

柳田は、家が絶えれば、戦死者を祀る人が誰もいなくなってしまうと言います。しかし、岩田重則さんによれば<sup>21)</sup>、だいたいみんな分かっていることなのだけれども、遺族たちがきちんと弔いをやっていたということだね。当然、みんなお墓を建てて、供養をきちんとやっているということなのだけれども、別に靖国の神を初代の先祖にしなくても、どうでもいいんじゃないのか。柳田國男には、やはり教条的な「家」と先祖というか、そういうものがあつたんだろうね。そのようなところを、空襲の中で一生懸命考えてしまったのかな。それに対して、折口の方はもっと柔軟だった気がする。どちらかという、折口の方が、まっとうな歴史的な意識をそれなりに持ちつつ、日本の靈魂観のようなものを妄想によって発展させようという発想、思考を持っていたのかなという気がしたのが、戦後に書いた、「民族史観における他界観念」、あれはやや長い、まとまらない論文だよ。收拾がつかなくて、あれもやはり口述筆記なのかな。折口のほとんどが口述筆記で、まとまらない論文なのだけれども、まあ面白いです。

中村生雄さんも、なぜああいうところに関心を持たなかったんだろう。関心の持ち方が違っていただけかな。生雄さんは、天皇との絡み合いで折口を読んできたという<sup>22)</sup>、最初の本からそうですね。中村生雄さんの場合も、それなりに反体制系で、柳田よりも折口なんだよね。天皇のようなものを解体していく一つの論理として、折口を読んだのだらうと思うんだよ。俺の場合は、それもあるけれども、靈魂のようなものを文化的に、という捉

## 弔い論をひらく

え方がずっとあるのかな。それが、もう一つの展開を与えるとどのようになるのかというところを、ばらばらな事例を使いながら、折口のことを半ば実証的に裏づけていったことになるのかなという気がするところだね。

折口は生きている者と死者との連帯や共闘という言葉は使っていないのだけれども、どうしたわけか、そのような言葉を改めて使いまくってるんですけどね。この頃、七〇年代に帰ってしまうことが多いのですけれども。そのようなところで、ある時期から、より鮮明にやろうとしてきたかな。ジョバンニとカムパネルラも、実際のところはその路線なのですけれども、これからジョバンニがカムパネルラを背負いながら、カムパネルラと共闘してお互いに成長していくという物語が、どういうわけか、かなり長くなってしまった。本当は、『弔いの文化史』の一章として短く書いて入れるつもりだったんですけどね。やはり暇だったのでしょね。決定的に暇だったということがあって、ずるずる、ずるずると。何回も『銀河鉄道の夜』を読んでしまいました。

### 宮澤賢治をどう考えるか

**永岡** 宮沢賢治を長く論じたのはこれが最初なのだと思いますが、川村さんの作品には賢治の詩はかなり出てくるのです。

**川村** それは、一つの戦略があって、宮沢賢治を使うとちょっと受けるかなという下心が当然あるのです。そして、一応、出身が東北だというあたりを少し出して、もう一つは、山折哲雄さんにはほんの少し対抗するという意図が。宮沢賢治の使い方です。

**永岡** 『幻視する近代空間』だと、「民衆の心性をひとりよく表出しえた詩人」<sup>23)</sup>と書いているのですけれども、ただ松田甚次郎の論文<sup>24)</sup>などでは、割と農村の現実を理解しえなかった師匠として出てきているので、良いところも悪いところもあると言ってしまえばそれまでなのですけれども、宮沢賢治というのは、どのような人なのか。

**川村** 勝手なやつでしょうね。金持ちのボンボンの、思い込みの激しい勝手なやつだね。人がよくて、絶えずうじうじと悩んでいるやつで、あるときに過激になってしまった。しかし、まったく続かなかったということで、まあまあ続いたんだろうね。あの人は、童話を一生懸命書いていますからね。かなりは東京で書いているんだろうね。国柱会に入会する時に、東京の宿屋で書いているものがかなり多いですね。法華経を童話なり物語で表現していこうという、その辺が濃厚にあった人なんだろうと。

そして、やはりそれだけでは、賢治は読まれなかったのだらうと思う。今回使った「手紙」という掌編があって、法華経の中の物語、逸話、エピソードをかなり使って、賢治が考案して、ピラのように配っていったようです。その辺りのモチーフが、後のやや長い『グスコブドリの伝記』、『銀河鉄道の夜』、そのようなところに入っていったといえますか、

## 弔い論をひらく

いわば直接的なイデオロギー、宗教っぽさが抜け落ちてしまった。それが、やはり賢治の上手だったところだね。人に読ませるといふか、単に法華經の伝道ではなくて、もう少し読む対象を広げていこうとしたのだろう。誰を対象にしたかはよく分からないけれども、子供を対象にしたわけでもないだろうね。『注文の多い料理店』も、子供に対して呼びかけている場面もあるけれども、子供ばかりではないのだろうという気がします。それなりのいろいろな面を持って、面白かった人なのだろうけれども、どこかで、真面目に農民なり人民なりに奉仕しなければいけないようなところで間違えて、晩年は肥料工場の販売人ようになってしまって、体を酷使して死んじゃったのかな。思い込みの多い人なんだなって思います。

**永岡** 好きなわけではないのですか。

**川村** それなりに好きだけだね。詩などはそれなりに面白いと思うけどね。これでは賢治は巫女さんのような、シャーマンのようなということを少し言ったけれども、鎌田東二さんみたいな「賢治は鳥のシャーマンだ」という<sup>25)</sup>、そのようなことはないだろうしね。言えなくもないのだろうけれども、そのような表現ができた人というか、妹との関わり合いが大きいのだろうと思いきけれども、死んだ人を常に抱えていたのだろうという気はします。もう一つは、あの人は、死と菩薩行というか、それを結びつけたんだろうな。そのような意味で、世のため、人のために尽くして、自己犠牲かな。そのようなところで自分自身の生涯もやればと、それなりに実践したのだろうけれども、肥料会社で一生懸命やってしまったということは、資本主義の世界の中にかめとられたのだというしかないと思います。そうかといって、あの時代に何で一生懸命できるかと考えると、あの人は国柱会でもだめだったのだから、童話というか、物語を書いたのだろうと思うけどね。それが、あの人の菩薩行なんだろう。

なぜ賢治は、『銀河鉄道の夜』のブルカニロ博士を削ってしまったんだろうね。ここが一番の賢治の思想が凝縮されたところだったと思うんだけどね。それほど法華經的な面もなく、なかなかいいことを言っているんだけど、天沢退二郎や入沢康夫の編集の全集や文庫本では出てこなくなってしまった。あれは、やはりもったいないという感じがした面もあるかな。それを全面的に出しまくったところだね。いろいろなシンボリックなものがどんどん入り込んでいて、賢治というのはなかなか面白いのだということを、改めて細かく読んで思ったね。小説一般がそうなのかもしれないけれども、賢治の場合は、かなりシンボリックな表現を入れ込んで書いているところが、けっこう面白いといえば面白い。いろいろな形で解釈できるということが、いいことなんだろうな。そのような意味での読みの共同体のようなものが、けっこう出ているのかもしれない。

## 鴨長明の構え

永岡 『弔いの文化史』の、先ほども少し出しましたが、鴨長明の話です。これはけっこう難解ではないかと何となく思ったのですけれども、この中で、『方丈記』を無常観を説いた作品として読む、そのような解釈への批判があって、そこから『方丈記』の読解を進めるなかで、過去の災厄を解決済みのこととするのではなく、未決の可能性としていわば引きずっていき、受け止めていくというような弔いのあり方が描かれていると思うのですけれども、もう少しざっくりと言うと、川村弔い論における災厄との向き合い方と、無常観に基づくようなそれとの違いを分かりやすく言うと、どのようなところになるのでしょうか。

川村 堀田善衛さんは『方丈記』を東京大空襲とつなげて読んでいったわけなんだけれども<sup>26)</sup>、私もやはりそのような読み方をしてみたいと思っていました。日本的無常観というところではなくて、世界の破局から、どのように自分はそれを受け止めてやっていくのかという、その辺りのところを堀田善衛さんは書いているのかなという気がしていました。実際のところ、『方丈記』の前半と後半はかなり違って、災害を書いているのが前半で、後半は自分の住みかの話なんだね。狭くていいのだ、人にも煩わされず、のんびりと暮らす閑居な住まいが一番だというような、「ああ、この人はそういうところなんだな」と。しかし、大原辺りだから、歩いて行ってもかなりかかるとは思いますが、京都の町にも近いところにいる、絶えず京都と行き来しながら、若干は立身出世も考えていたということがあったんだろう。そのあたりで言うと、時代と向き合った人かという、そうでもないような気もするっていうかな。

たとえば、源平の戦いに対する態度とか、ややもしたら平家が福原に都を移した時も、自分は雇われるのではないかと行っているような感じもします。仕官というか、勤め先を求めてという、世俗的な欲望がけっこう強い人だなというところもある。その一方で、仕官のようなものがだめになると、静かに暮らしていこうという方向にころりとしてしまう晩年というか、なかなか都合のいい人で、臨機応変といえば臨機応変。体制というか、世俗に対して、ある意味ではかなり距離を取ってしまう。

西行のような武士ではなかったということもあるのだけれども、西行であれば捨ててしまうという、潔いんだけどね。宮廷とは関わりながらも、武士は捨ててしまう。その辺は、長明は神主出身ですから、神社の中でもうまく出世できなくて、辞めてしまう。親の職業を捨てていくといいますか、それに対する負い目があったのだろうと思うけれども、世俗の栄達、立身出世はある程度やめて、和歌だけは残したいという意欲は十二分にあったという、そのようなところが面白いけれども、いまいちつまらない面もあるなと思ってしまいます。ですから、堀田善衛さんのような形でもっと長く書こうかとは思っただけ

## 弔い論をひらく

れども、「いまいちつまないやつだな」とってしまったというかな。だからこそ、山折さんをはじめ、いろいろな人が「日本の無常観を表した」というような形で、いいかげんなところで持ち上げられているのだという気がしないわけでもない。

しかし、やはり『方丈記』をかなり推敲して、後世に残そうとした意欲は感じた気がする。文章が、それなりにうまいといえぼうまい。リズム感もあって、けっこうずっと一貫している。前半と後半はやや違うのだけれども、前半は、災害について書くので緊迫感がある。当時は災害について書くという発想はなかったんだろうけれども。あの当時だから、『平家物語』はまだできていない段階なのだろうけれども、平家は滅びているから、琵琶法師が歌っているものを少しは聞いているのかな。そのような合戦に対しては、かなりの距離をとっている。ただ、藤原定家などは「いっさい関係ない」というようなことを言うてしまうのだけれども、あれも言葉だけかもしれないんだけどね。それとはまた違って、長明はそれなりに距離を取っているところが、当時の人においてはなかなかだということかな。それだけ余裕があるのだろうと思うのだけれども、親の財産はほとんどないはずだから、どのようにして食べていたのかな。和歌所から若干金をもらっていた時期もあるのだろうけれども、山の中で畑を作っていたわけではないだろうから、そのあとはどのようにしていたのか。お布施をもらって歩いたわけではないだろうからね。

『弔いの文化史』で住まいについても少々書いたのだけれども、鴨長明の場合は、自分自身が浄土に行くというか、それだけの信仰で、戦乱で殺された人をどのように供養するのかということはまったく考えていない人だね。当時の人だから、当然先祖なども出てきません。この時代の人には、現世の中で生きていくことをある意味では中心にして考えて、その何分の一かであの世のことを考えていたのかなという感じだね。

## 震災と弔い

**永岡** 弔い論が本の形になったのが二〇一一年以降なので、出す方も読む方も、タイトルから否応なく震災の話を書き連想するところがあって、『弔い論』の最後の方の震災の話も、たしか出版社サイドからのリクエストだったようなことを聞いています。鴨長明の話もそうだと思うのですが、巷の震災後の言論状況に対する批判のようなものを、直接・間接に書かれているような気もするのです。川村さんが震災後の言論状況を見ていくなかで、問題はどのようなところにあるのかということと、震災後の弔いについての考え方について、改めてお話しいただければと思います。

**川村** 一つは、家族写真、アルバムのようなものをみんな探し求めて、「家族の絆を求めて」というようなところがあったんだけど、「そんなもんが家族の絆なのかい」というところが、やはり一つあるだろうね。そのようなもので作り上げられる家族のようなものが、

## 弔い論をひらく

どれほどのものなのかということです。家族写真そのものを探して、改めて作り直すという、それはそれでいいとは思っただけけれども、マスコミが出しすぎて、泥で汚れた家族写真を洗うボランティアなどが美談として語られていく。自分の家族写真を展示されたところで見つけて、大切に持ち帰って喜んでいる被災者たちという、そのようなものがけっこう出ていて、「作り過ぎだな」というところかな。

それから、やはり遺体を出さないということ。動物もそうだろうけれども、人間の遺体も出さない。これまでもそうなのだろうけれども、マスコミは公衆の前には見せない。見たからどうということもないし、想像でもいいかもしれないけれども、被災した人たちの、死んでいった人たちの姿を、もう少しリアルな形で、迫るような形で出してみろというか。そうすると、生き方などがけっこう変わる場合もあるのではないかという気が、しないわけでもないと言ったらいいかな。

それは、自分の親なり何なりの遺体がマスコミでさらされることを嫌がる人たちもいるだろうけれども、そのような中でも、死を絶えず確認していくようなところで、遺体のようなものを特に今の若い子どもたちにきちんと見せるということは、必要なのではないかという気がする。死の教育やターミナルケアもあるけれども、死んでいく姿、あるいは死んだ姿を見せることの方が、よほど重要なのではないかな。そうすると、大きく言えば戦争などの見方も、少しは変わってくるのではないかと思うところなだけけどね。死んでいく姿をほとんど見ることのない現在というか、そのようなことに対して、けっこう重要なきっかけだったはずだったけれども。

もう一方では、被災者側においても、例えば火葬場がだめになってしまって、とりあえず浜辺などに仮の土葬をした。そうすると、「土葬は嫌だ」と。土葬は嫌だという感覚が、よくわからないというか。土葬すればいいというものでもないのだけれども、遺体に対する感覚が変わったんだな、というのが、今回のひとつの違和感だったのかなという気がする。昔は土葬であって、それはそれでいいのではないかと思う。火葬すれば、死んだ人も熱くて嫌なのではないかという、そのような感覚が昔はあったのではないかと思うのだけれども、今の俺なんかと同じ年代の人もそうだろうと思うけども、火葬の感覚が一般化されている。焼いて白骨になって、それをお墓に納めるという。生々しい遺体をそのまま土の中に埋めた方が、よほどいいのではないかと俺なんかは思ってしまうのだけれども、死なり死体に対する感覚が変わってきたということも、一つ大きく感じたな、と。

それから、ボランティアやいろいろな芸能人が来て、持ち上げられてしまうというか。それはテレビに映っている部分だけだけれども、「自分たち頑張ってます」という姿を見せたがっている人たちに対して、違和感といたらいいかな。やる気力もなくなって、家族写真などを飾る気がないという、『朝日新聞』で唯一の事例くらいかな<sup>27)</sup>。そのよ

## 弔い論をひらく

うな人たちこそクローズアップすべきで、美談ではなくて、落ち込んでいる人たちをもっと……。

でも、美談とか悲話をもっともらしく伝えるのがマスコミの役目で、世間の嫌がること、世間に背を向けている人を探し出す人もいていいのではないかと思っています。遺体にしても、悲惨さのようなものが隠蔽されていくようなところがある。いろいろな形であるものをタブー視して、隠蔽していくようなところが、あのような中でけっこう出てきたのではないかという気がする。そのあたりに対して、あまり言う人がいない。

地震・津波の場合は、誰が原因ということもない、やはり天災だろう。しかし、それなりに行政側の作った要因もあるだろうという気がする。昔、三陸沿岸で見たことがあるのだけれども、防潮堤がめっちゃくちゃ高い。景観は悪いし、このようなものを造ってどうするのかと。確かに津波は防ぐのだろうと思ったけれども、実際のところ、今回の場合はだめだった。それよりもあつけらかんと、防潮堤などない方が逃げやすかったという面も、けっこうあったのだろうと思うんですけどね。津波に対して備えていたはずなのに、これまでの練習も、いろいろな施設も、ほとんど役に立ちなかった。そのようなことをもう少し振り返るべきではないか。単に防潮堤をもっと高くするのか、高台の方に行くのかという、土建系に流れていく日本。そこでしか金が出ないということもあるのだろうと思うんだけど。

あとは何だろうね。宮城県では、名取の方の平野部で、かつて田んぼだったところが新興住宅になっていて、その辺りが全部、津波でやられている。そのようなところに家を建てて、誰も何も考えずに、個々人が個々人の住まいを求めて、そこで安住しきってしまったという、経済的な面もあるのだろうけれども、そのような生き方が露呈していったところがあるのではないかという気がしました。誰もあそこまで津波が来るとは思わなかったんだらうけど。

しかし、考えてみれば、『方丈記』の時代からそうかもしれないけれども、人間は危機感を絶えず背負いながら生きていってもしかたがないし、のんきに暮らせばいいのではないかというところもあります。のんきに暮らすうえでも、ある程度は歴史的なことを振り返って、のんきに暮らすのが一番ではないのかな。常に危機が迫っているところで生きてみても、ほとんどの人は、そのようなことを考えながら生きているわけではない。

### 歴史叙述と亡霊的なもの

永岡 『弔い論』は、誰それというような具体的な死者との関わりのお話でもありますけれども、過去の出来事を現在や未来においていかに位置づけていくのかといった、歴史叙述の問題と絡めて論じられているところがあります。とくに第四章に出てくる「伝承解釈者」

## 弔い論をひらく

としての私（たち）、それから、その原型を成すものとしての「諸国一見の僧」の話が出てきているわけです。その中では、文化や歴史について書く、いわゆる研究者といますか、私たちといますか、そのような人たちの位置について論じられているところがあったと思います。弔い論と、歴史を書く、文化を書くということの関係については、どういうことを考えていますか。

**川村** まず、亡霊なるものを、一つは歴史的な、歴史を象徴するものとして捉えようというところがあったんだろう。歴史そのものも、亡霊的なものも。それをどのように解釈するか。どのようにも解釈できるのだろうと思うのだけれども、たとえば文書でもそんなんだろうと思うけど、亡霊的なものとして捉えて、それが現在においてどのような意味を持つのかということもあるんだろうね。文字で表され、出来上がっているものなのだろうけれども、それをどのように読めるのか。そして、亡霊的なものとして捉えることによって、それなりに自分自身のささやかな状況のようなものも、ある意味で捉えることもできるようになるのかなというあたりかな。

俺の場合は、史料の読み方もテーマにするものも、だいたい都合のいいものを選んでくるといえるか、都合のいい読み方をするとところがあるんだけどね。挫折でもいいし、怨霊などもそうなのだろうと思うけれども、あるところで留まってしまったかもしれない人の生きたプロセスと言ったらいいか、それをもう少し延ばしていくとどうなるのか。文書なら文書でもいいし、そのいいところ、可能性のようなものを、見つけていくことをやってきたつもり、といえるかな。歴史学などの場合であれば、ある意味で客観的に、ある時代なら時代を分析して、「そこでこういうことが起こった」というところを出して、歴史的な事実を作り上げて、重ね合わせていく。しかし、それだけではつまらないだろうと。生きている人間がどのようなところに関心を持って見ていくのかということ、たとえば日本の国家というものを解体していくという、そのような可能性をはらんでいるものを探していった、そこを取り上げていこうという方向でやってきた。

そのような意味で、亡霊自身が果たせなかったようなものを見ていくというか、受け継いでいく、ある意味でこちら側の妄想的なものなのだけれども、そこを出していく。そこをやることこそ、歴史学ではないかもしれないけれども、一つの方法としてあってもいいのではないかな。だから、左翼の運動もそうなのだけれども、ろくなことをやってこなかったとばかり言ってもしかたがない。そうではなくて、ある意味では不十分だったかもしれないけれども、敗けたことから何らかの可能性をつないでいくというか、そのようなことをやった方が面白いのだろうということがだいたい、『幻視する近代空間』あたりからの出発点なんだろう。ですから、私がやっていることは、歴史学ではないといえないと思っています。

## 弔い論をひらく

精神医学研究などの人たちも、最近『精神疾患言説の歴史社会学』<sup>28)</sup>という厚い本を出した人がいて、「脳病」という言葉は、いつ頃から使われたかと、丁寧に調べています。きちんと調べれば、私が記したことは確かに最初ではないかもしれないけれども、脳病なるものでもいいし、精神病患者でもいいのですが、そこから精神医学の体制を解体するなり、批判するなり、そのような視点というものが、やっぱり不可欠だろう。それは、ある種のきちんとした事実、経過などをきちんと押さえてしなければならないということもよく分かるけれども、私の場合は、ある程度でいいだろうと思っています。そこから、批判すべき部分をもっと出した方がいいだろう、何を志して問いを發すのかということがきわめて大切ではないかと思ってきました。

だから、あまりにもリアリズム、客観主義というようなところで論文を書いても、本人が面白いのか、疑問だと思ってしまうものがあります。誰が言っていたのか、「未発の可能性」というようなこと。安丸さんも言っていたかどうか忘れてしまいましたけれども、そのようなところを探すといいますか、それはけっこう亡霊的なものかと思います。デリダの誤読というようなものかもしれないけれども、そのようなところが面白いということはずっとやってきた気がするかな。

**永岡** 川村さんが院生に対して指導といいますか、引用のしかたにかなりこだわりがあって、形式的なことではなくて、「言葉をどんと出せ」といつも言っていますね。この資料でも、たしか『オトメの行方』のあとがきにもありましたが、オトメたちの「声を聴き取り発掘するなかから、時代の感性を浮き彫りにして、現代へと通底するような歴史を描こうと構想した」、「それが私の唯一といえる歴史叙述の方法である」<sup>29)</sup>と書いています。そのあたりも、今、おっしゃっていた、亡霊としての史料に向き合うということとつながるのですか。

**川村** そうでしょうね。たとえば高野悦子は、恋愛関係か分からないけれども、単にそのようなことで死んだ人じゃないかと言ってしまっても面白くないというか、面白いところはどこなのかということです。自分の「生きたぜ」というようなところ、しかし、どこかで踏みとどまらざるをえなかったようなところ。その辺りをもう少し延ばしていくと、どうなのかという感じかな。高野悦子であれば、『二十歳の原点』<sup>30)</sup>のような形で残したという、それこそが貴重なのだろうということだと思います。いろいろな本もそうなのだろうと思うけれども、そこから、それぞれの関心で何らかのものを出していければいいのではないのかな。

たとえば、出口なおさんにしてもそうなのだろうと思うけれども、どこが面白いのかなということです。一発こう、すっ飛んでいったというのが面白いということで、幻想か何か分からないけれども、神様を作ってしまった、「神様イコール自分」と言ってしまっ

## 弔い論をひらく

てもいいのだろうけれども、外部の権威を作って、それで言うていくと言ったらいいか。なおさんが言うていることは、明治中頃の反近代化、反文明開化という、極端な反動というところがあると思うのだけれども、反動だからこそ、明治の国家のようなものに対抗していくものがけっこう出てくる。それが極端な反動、過激な反動だったからこそ、後々の人がある種の可能性を読み込んで、いろいろな形で使うことができる。そのような言葉を出した人なのかなという気がする。

それに引き換え、王仁三郎はやはり面白くないというか、言葉の上での可能性、面白味がないのが王仁三郎で、勉強しすぎてしまったというところがあるね。決まった定型的な心靈学なり、国学なり何なりの枠の中でやってしまっている。確かに天皇制神話から逸れていってしまっているところもあるとは思いますが。王仁三郎の面白いところは、実践というか、行動は面白いと思います。何を考えていたのかわからないけれども、とにかく国家なるものを幻想していったというか、違った国家だったかも分かりませんが。また、王仁三郎に心服した信者たちのある部分は、天皇制国家を超えるようなことを考えてしまった場合も、少しはあるかな。ある意味では妄想の歴史というようなところが、取り上げていけば面白いのではないかと思っています。

明治初期の新政反対一揆なども、反動系の一揆で、暴動なんだよね。それがなぜ面白いのかということだね。国家のようなものを解体していくエネルギーなり、そのようなものがあったのだろうという気がする。一揆などの場合は全てそうなのだろうと思うけれども。幅広く言えば、権力者たちが書き残したもの、そこから読み取れる部分も、けっこうあるだろう。「オトメ」もそうで、少女たちが「一生懸命書きたい」という感じで書くわけです。そこが面白いというか、「誰かとつながりたい」というエネルギー。これまでの文芸批評は、そのへんをそれほど取り上げていません。オトメのお便りの分析は、実は文芸批評の批判として構想したつもりです。『幻視する近代空間』は、実は歴史学批判。そのような過去の文章の読み方も、適当につなげてしまえば、亡霊たちを呼んでくる読み方になるのかなという気がしないわけでもない。過去の亡霊にかこつけながら、ある意味では無責任な、勝手なことを言ってしまうということだね。

そのような意味で、いわゆるアカデミズムというものは、けっこうつまらなかったのだなというのが実感です。知識的なレベルでは勉強になるけれども、それから広がっていくものが数少ないということが、七〇年以降の若干読書した印象だな。面白いものは、けっこう限られているんじゃないかな。たとえば、北村さんの「骨から何を考えるか」とか<sup>31)</sup>、そういうところですよ。下手に叙情というか、涙には流れないで、そこを超えて、骨が一つの生き証人のようなもので、そこを読み取るということだね。植野真澄さんがやっていた傷痍軍人は<sup>32)</sup>、まさにそれそのもので、俺だったら絶対にやりたくない暗いテーマな

のだけれども、傷痍軍人はやはり戦争を背負っているのだということですね。

### 「弔い」ということば

**北村** 『弔いの文化史』に関する質問を、少しいいですか。お話を伺っていて思ったことは、先生が「弔い」という言葉を選択したのは、なぜなのでしょう。「慰霊」や「鎮魂」など、手垢のついた言葉もたくさんある中で……。

**川村** 「葬送」でもいいし。英語で言ってしまうと、「弔い」はおそらくfuneralになるのでしょうか。これは「葬儀」にも使うのかな。「弔い」は何となく格好がいいというだけで(笑)、語源として「訪ねる」っていうところだね。そのようなことかなというところで、直接的には、死者が出ると、訪ねていくということなんだろうと思うけど。中世あたりからは、供養することも「弔う」という言葉で言っていたという、『太平記』との関連で少し出してみたけれども<sup>33)</sup>、日本のこのようなところにも出てくるのかと。漢語ではなくて、国粋主義でもないのだけれども、大和言葉と言うとまたあれですが、古語というか、ラテン語もそうなのだろうと思うけれども、いろいろな意味合いがあります。それがある程度歴史的に決まっていくというなかで、弔いも、「訪ねる」という意味合いがなくなってしまって、葬式との絡み合いで言われるようになっていく。そのようなところで、言葉そのものも変化して、少し探ればけっこう面白い面も出てくるのが「弔い」かな、ということだね。だから『葬儀の文化史』や『葬送の文化史』じゃあ……」というね。最初から考えなかったけれども、「葬り」や「屠る（ほふる）」。「屠る」となると、屠殺の方も出ちゃうから。ただ、死者を殺していく、屠るという、そちらもけっこう面白いかもしれない。

**北村** 先生がその言葉を選択しようと思いだめたのは、だいたいいつ頃ですか。

**永岡** 「戦死者のゆくえ」研究会は、二〇〇〇年からやっていて、その流れですかね。

**川村** うん。ただ、あの頃は、戦死者のときは「弔い」という言葉は使わなかったからね。あまり使う必要もなかったんだろうけれども。

**北村** そのような動詞から派生した生活言語的な意味合いの言葉を選択するということは、先生の内的必然性がどこかであったのですか。

**川村** あまりないと思います。字面がいいなというところがあって(笑)。山折哲雄から教えられたことは、「題名だぜ」と。あれだけが山折さんの教えだと思っているのだけれども。

「弔い」という言葉がいつからあるのかというのを、小学館の国語大辞典でも調べただけだけれども、どうも「訪ねる」もあるんだなということで。鷺田清一さんは、「ラテン語はこういう意味合いもあって」とやるでしょう。「ラテン語だね、さすが」と。でも日本

## 弔い論をひらく

語もそれなりの複数の意味合いがあるということで、漢字で表されると決まったイメージが出るけれども、仮名でいくと、もう少し広がったイメージができてくるという気がしたんだよね。関連するような言葉として面白いものはあまりないのだけれども。「[「諸国一見の僧」のメッセージ]<sup>34)</sup>あたりで弔いのようなことを言ったような気がします。そこにも出しているけれども、能は面白いなという。テレビで見ると退屈だけれどもね。というか実際の能は、俺は見たことがないかな。歌舞伎は見たことがあるけれども。

**永岡** 黒川能は見ましたけどね。

**川村** そう、黒川能は見たな。謡曲も、やはり面白い。言葉が素晴らしいね。漢字もたくさん使っているのだけれども、本当の美文を作ったなというね。簡潔というか、素晴らしい日本語の文章を作ったものが謡曲ではないかという気がするね。この論文では寿町の慰霊祭と全国戦没者追悼式の靖国と対照し絡めてしまうという、そんなことをやってるんだね。あまり「弔い」というのは出てこないな。

### 「家永統の願い」

**ガラシーノ** 「弔い」との関係で、柳田の『明治大正史世相篇』の「家永統の願い」で位牌ばかり背負って行き倒れになったお爺さんの話を、先生が『幻視する近代空間』の中で出していると思うのです。今日、『幻視する近代空間』もいろいろなところで取り上げられたのですが、そうしたものも、弔い的なものを考える上で関係があるのでしょうか。

**川村** あまりつなげたことはないのだけれども。柳田は、位牌が一つの文化財なのだというね。家督の一部で先祖代々続くという、あれを重視したというか、あの爺ちゃんも重視したんだろう。下関のどこか、よく分からない人で、忘れちゃったけども、あれも岩田重則さんが新聞を調べたのですね<sup>35)</sup>。俺も少し調べただけだけれども、分からなかった。『朝日新聞』を見たのだけれども、あれは地方版に載っていたんだね。下関だから、西日本版かな。あれは、弔いというよりは、先祖を背負ってしまった爺ちゃんなのだろうということで、考えてみれば、先祖を背負って自分自身を弔っていったのかな。

(二〇一五年一月二三日、大阪大学日本学研究室にて)

※本稿は、イシバシ評論編集部編『イシバシ評論：Cultures/Critiques別冊』（国際日本学研究会、二〇一六年三月）に掲載されたインタビュー「弔い論への水路——妄想派の軌跡」の一部を再編集したものである。

## 弔い論をひらく

### 注

- 1) 『弔い論』 青弓社、二〇一三年、『弔いの文化史』 中公新書、二〇一五年、「ジョバンニと弔いのイニシエーション——「みんながカムパネルラだ」考」『文化／批評』 冬季臨時増刊号（〔弔いの形をめぐる歴史民俗学的研究〕二〇一四年度科研中間報告書）大阪大学大学院文学研究科、二〇一五年。
- 2) 「誰が死者を弔うか——弔い論序説」『岩波講座宗教九 宗教の挑戦』 岩波書店、二〇〇四年。
- 3) 『幻視する近代空間——迷信・病氣・座敷牢、あるいは歴史の記憶』 青弓社、一九九〇年。
- 4) 『弔いの文化史』、二八六頁。
- 5) 小泉義之『弔いの哲学』 河出書房新社、一九九七年。
- 6) サラ・マレー『死者を弔うということ——世界の各地に葬送のかたちを訪ねる』 椰野みさと訳、草思社、二〇一四年。
- 7) 安丸良夫編『大系仏教と日本人——近代化と伝統——近世仏教の変質と転換』 春秋社、一九八六年。
- 8) 「弔いにおける死者と生者——死者への想像力をめぐって」『金光教学』 五五号、二〇一五年、一七五頁。
- 9) 鈴木岩弓「書誌紹介 川村邦光著『弔い論』 青弓社（二〇一三年二月）」『日本民俗学』 二七八号、二〇一四年。
- 10) 「隠れキリシタンの〈近代〉——近代日本の民俗的心性1」『天理大学学报』 一六三号、一九九〇年、「アニマの覚醒とキリシタン「一統」の結衆——近代日本の民俗的心性2」『天理大学学报』 一六五号、一九九〇年。
- 11) 「救世主幻想のゆくえ——皇道大本とファシズム運動」竹沢尚一郎編『宗教とファシズム』 水声社、二〇一〇年。
- 12) 大本天恩郷宣伝部編『おかげばなし』 第二天聲社、一九二八年。
- 13) 「金太郎の母——山姥をめぐる」田中雅一『女神——聖と性の人類学』 平凡社、一九九八年、『地獄めぐり』 ちくま新書、二〇〇〇年。
- 14) 宮田登『妖怪の民俗学——日本の見えない空間』 岩波書店、一九八五年。
- 15) 小川プロダクション製作『どっこい！人間節——寿・自由労働者の街』 一九七五年。
- 16) 『戦死者のゆくえ——語りと表象から』 青弓社、二〇〇三年。
- 17) 折口信夫「民族史観における他界観念」折口博士記念古代研究所編纂『折口信夫全集 一六』 中央公論新社、一九七六年（原著一九五二年）。
- 18) 「鎮魂のゆくえ——折口信夫のタマフリ・タマシヅメ論から」『岩波講座日本の思想 五』 岩波書店、二〇一三年。
- 19) 「折口信夫『古代研究』（一九二九～三〇年）」筒井清忠編『日本の歴史社会学』 岩波書店、一九九九年。
- 20) 加藤典洋「死が死として集まる。そういう場所」『すばる』 三七巻九号、二〇一五年。
- 21) 岩田重則『戦死者靈魂のゆくえ——戦争と民俗』 吉川弘文館、二〇〇三年。
- 22) 中村生雄『折口信夫の戦後天皇論』 法藏館、一九九五年。
- 23) 『幻視する近代空間』、二〇七頁。
- 24) 「賢治の弟子 松田甚次郎論——東北農民の「農民劇」実践のゆくえ」川村邦光編『語りと

## 弔い論をひらく

実践の文化、そして批評』文化／批評編集委員会、二〇〇三年。

- 25) 鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』岩波現代文庫、二〇〇一年。
- 26) 堀田善衛『方丈記私記』筑摩書房、一九七一年。
- 27) 『弔い論』、三三九頁。
- 28) 佐藤雅浩『精神疾患言説の歴史社会学——「心の病」はなぜ流行するのか』新曜社、二〇一三年。
- 29) 『オトメの行方——近代女性の表象と闘い』紀伊国屋書店、二〇〇三年、三一六頁。
- 30) 高野悦子『二十歳の原点』新潮社、一九七一年。
- 31) 北村毅『死者たちの戦後誌——沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』御茶の水書房、二〇〇九年。
- 32) 植野真澄「白衣募金者一掃運動に見る傷痍軍人の戦後」『大阪大学日本学報』二二号、二〇〇三年、「白衣募金者」とは誰か：厚生省全国実態調査に見る傷痍軍人の戦後」『待兼山論叢日本学報』三九号、二〇〇五年。
- 33) 『弔いの文化史』、iii頁。
- 34) 「諸国一見の僧」のメッセージ——〈モノ〉のざわめきに耳を澄ませ』小松和彦編『これは「民俗学」ではない——新時代民俗学の可能性』福武書店、一九八九年。
- 35) 岩田重則『戦死者靈魂のゆくえ』。

(かわむら くにみつ 大阪大学大学院文学研究科教員)

(ながおか たかし 日本学術振興会特別研究員PD)

(きたむら つよし 大阪大学大学院文学研究科教員)

(ファクンド ガラシーノ 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)